

こども環境学会設立にあたって

— 学会設立の趣旨と背景 —

こども環境学会 副会長（理事）織田 正昭

このたび、様々な領域の学者、研究者、実践活動団体・機関などの賛同を得て、こども環境学会なる新しい学会が設立された。ここでは、学会設立の趣旨とその背景を説明し、もってよりよいこども環境に向けて、一人でも多くの方々が関心を持っていただけるように、そして、今後の学会の方向性を考える一資となることを期待して小文を記した。

【学会設立の背景】

近年、こどもを取り巻く環境は急速に変化している。こどもの事故、児童虐待、携帯電話絡みの事件、学童による殺人事件、TVゲーム、インターネット関連の犯罪など、マスコミには連日のようにこどもが関わる社会問題や事件が報じられている、一方でまた、こどもの生活であり権利でもある遊びは、遊び仲間、遊び場、遊び時間などの減少によって確実に失われつつある。こうしたこどもを取り巻く環境の変化の背景は極めて複雑化かつ多様化しており、これまでの教科書的な対応や、定説的な理論だけでは説明できない場合が増えてきた。こども環境に由来する社会問題の増加を考えるならば、悲観するわけではないがこども環境は果たしてよくなっているのか疑問すらでてる。科学そのものは理論として発展しているのであろうが、これらの問題に対処すべき適当な学問分野、学問体系がなかった。それはこれまでの学問が専門化という名のもとに細分化され過ぎて、こども、もしくはこども環境という視点から総合的、統合体としてとらえる分野がなかったことにもよる。この点は、こどもに対する省庁の縦割りの行政施策の限界とも相通じるものがある。近年のこども環境の変化は極めて早く、たとえば遊び一つを取り上げても、爆発的流行があれば、こどもの遊びの様相は一変してしまう。こども環境に関わる現象を科学的に説明しようとしても、環境の変化のスピードのほうが速くて証明そのものが難しい場合も多い。

近年の急速な都市化は、こどもの生育環境を大きく変化させた。たとえば高層住宅の増加は必然的に、高層環境で生まれ、そこで育つこどもを増加させ、新たな母子の健康影響問題を生んでいる。外出できないこども、外で遊ばないこどもを含め、高層居住の母子の健康問題に対して一体誰が、どのような分野の研究者がアプローチすればよいのだろうか。

さてこども環境学なる学問は、『こども環境』の学問であっ

て、単なるこどものための『環境学』ではない。すなわちこども環境学は、既存の環境学のこども版ではない。総合と調和をパラダイムとしてうたい学際性を強調して設立された学会は多々ある。本学会もこれをうたっているが、それは「こども環境」という一つのキーワードに向けられた総合と調和であり、これまで一般的に漠然と認識されてきた環境学ではない。こどもには成長発達と調和したこども特有の環境が存在し、養育者としての親ことに母親の影響が極めて大きい。医学的にみるならば胎内環境を含めて母子保健の立場から成長発達段階に応じたこども環境を考える必要がある。

そもそも環境の概念は広く、その分類の仕方もいろいろであり、定義することは難しい。定義論に終始しても意味がないがここでは、環境を、医学・公衆衛生学分野でよく用いられる物理的環境、化学的環境、生物的環境、社会学的環境の4つに分けて考えたい。これまでの環境または環境科学のほとんどすべては物理化学的環境中心の科学であり、そこに主体としてのこどもはほとんど入り込む余地がなかったといえる。こども環境学の中心はこどもであり、単に大人にとって自己満足的な、こども不在の環境学であってはならない。表に、こども環境を示すキーワードをいくつか例示した。

表 こども環境のキーワード（例）

物理的環境	(遊び場、高層住宅居住、園庭、河川)
化学的環境	(環境ホルモン、光化学スモッグ、食品添加物)
生物的環境	(アレルギー、感染症、食中毒、ペット)
社会的環境	(児童虐待、不登校、携帯電話、孤食)

これらの分類はあくまで環境理解を容易にするためのものであり実際にはこれらが複雑に絡み合っている存在していることはいまでも無い。

学会は、一般的に研究者の集まりと理解される。こども環境学会は学術研究をコアとしながら、こども環境分野で実践活動している方々との連携を重視している。大学や役所の机の上からは決して生のこども環境は見えにくいし、実践の現場だけでは、問題解決の糸口が見えにくい。相互に補い合っ

- 1) こどもを取り巻く環境が急速に変化している。
- 2) 環境に由来するこどもの社会問題の増加している。

- 3) こども環境を総合的に扱う学問体系がなかった。
- 4) こども環境を大人の視点中心に考えてきた。
- 5) 学術と現場の実践活動との乖離がある。
- 6) 環境の概念が質的に変化しつつある。
- 7) 研究活動の成果の活用が不十分だった。
- 8) 急速な都市化環境へのこどもの適応ができなかった。
- 9) こどものための環境作りの必要性が増大した。

【学会設立の趣旨】

こども環境学は、既存の学問に増して学際性が高く、分野として明確に区分しにくい。それはこどもという成長発達という変化を伴う一つの統合体を扱うために、アプローチのための切り口が明確に見えないことにもよる。各分野の専門家が物理的に集合しても連携がなければ単なる学問の寄せ集めに過ぎない。こども環境学会では会員が、自分の専門分野を扱いながら境界をなす周辺領域を理解し、積極的に接点を持つことが期待される。

背景の項でも触れたが、学会は専門の学者の集団と理解がされがちであるが、学術・研究と現場の両輪が等しく回ることによって、こども環境学は偏りのない学問となる。そのために、こども環境の専門家を養成しつつ、一方でこどもの環境の実践活動を学会として積極的にサポートしていく必要が出てくる。こうして学会活動を通して得られる成果が単に会員の学問的興味にとどまってしまうならば、意味を成さない。成果を活動現場に応用するだけでなく、行政などに対しても積極的に提言を行なっていく姿勢が本学会に強く求められる。こどもは環境を自分で変えることができない。それゆえ周囲の大人がこどものための環境を作っていく必要があり、また支援していく必要がある。同時にこども自身による様々な環境活動を積極的にサポートしていかなければならない。本学会では学者研究者、実践活動をしている人たちだけでなくこどもも会員として参加できるようになっている。これによって結果的にこどもも大人も様々な環境に対する意識が高揚することになる。現代は国際化時代である。人、動植物、物資、病気など様々なものが国際的に往来している。こども環境も一国だけで考えていけばよいという時代ではなくなった。「こどもの権利条約」に謳われた精神を尊重しつつ、“こども環境”をキーワードにして国際化時代にふさわしいネットワークを作っていくことも本学会の大きな目標の一つである。以上をふまえ、本学会の設立の趣旨を以下のようにまとめた。

- 1) 学際性の強調
- 2) 学術研究と環境活動現場との融合
- 3) こども環境活動の積極的サポート
- 4) 少子化時代を踏まえたこどものための環境づくり

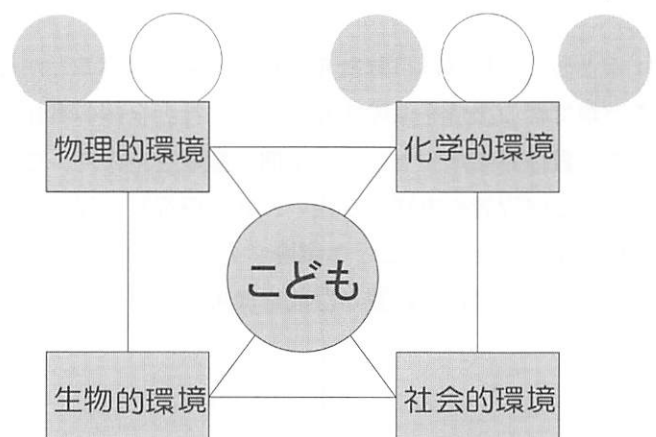
- 5) こども環境の国際的ネットワークの構築
- 6) こども環境のスペシャリストの養成
- 7) 関連諸団体、機関との連携
- 8) 行政などへの積極的提言

本学会はすでに述べたように“こども”もこども会員として参加できるようになっている。わが国にはすでにこどもたちが主体となってこども環境活動を行なっているグループや団体、組織は実にたくさんある。学会としても積極的にこれらを支援し、こども環境を理解し、共感できるこどもたちを育てていくことも大きな目的の一つである。

こども環境学の構築には、細分化した、より分析的な方向からアプローチする専門家 specialist と、それらをもとにこどもを統合された有機体として組み立てていく専門家 generalist が共に必要であり、双方がかみ合うことが重要であり、そのために本学会では学際性を念頭に置きつつ研究会やセミナーを積極的に開催していきたい。

以上、学会設立の背景と趣旨を、私なりにまとめてみた。会員諸氏諸兄におかれては異論もあろうが、それこそが、学会活動を動かすエネルギーになるものであり、積極的に歓迎したい。本学会はこども環境を最大のキーワードとして、会員の立場、老若男女を問わずこども環境を積極的に考え、活動し、支援し、社会に還元し、周囲に提言していくことを目的に設立されたものである。本学会を通じてこども環境学、そしてこども環境学会が、発展していくことを期待したい。最後に本学会設立の精神を一文で示す。

Think globally, act locally, for sound and better environments for all children on the earth.



設 立 趣 意 書

いま、こどもたちの育ちが危うくなっています。

ものに埋もれ、食べるに不自由しない暮らしの一方で、不登校、非行、犯罪、生活習慣病など、こどもに係わるさまざまな社会現象が目立ってきています。こどもたちのところとからだの両面において、「活性」が急激に低下しているのではないかと心配されます。

こどもたち自身の危うさばかりではありません。こどもの日常生活において、事故や犯罪などの危険が迫り、いじめや児童虐待など友達や親子の人間関係においても、さまざまな問題が顕著になってきています。家庭や教育現場や街などさまざまな場において、こどもたちに係わる問題が多発しています。

なぜ、このような事態が生じたのでしょうか。

わが国の1950年代以降の半世紀は、高度成長とそれに続くバブル経済に象徴されるように、経済的な繁栄を目指して、都市への人口集中と自然破壊が進み、機能や効率が優先される都市生活の中で、家族や社会のありようが大きく変化してきました。核家族化や少子化の進展に伴って、家族関係が変化し、地域社会の崩壊が危惧され、自然体験や社会体験を含む多様な遊びとその環境が貧困化し、メディア環境がこどもたちを取り囲み始めています。家庭、居住環境、地域社会、学校、街、メディアなどこどもたちを取り巻く環境が大きく変化してゆく中で、環境の変化がこどもたちにどのような影響を与えるかが十分に把握されておらず、対症療法的な対策でしか対処できていないのが、現状ではないでしょうか。

こうした危機的な状況に対して、さまざまな方面から分析が行なわれ、いくつかの提案が提示されたり、実行されたりもしています。都市工学・社会工学・建築・造園などの分野では、こどもたちが安全に育つ空間を模索しています。医療・保健・心理・福祉・教育などの分野では、こどもたちの健やかな育ちを保障する方策を模索しています。

しかし、こどもたちを取り巻く環境について、ハードとソフトの両面から総合的に分析され、論じられることはほとんどありません。こどもたちを取り巻く空間や社会的環境とこどもたちの心身の成育との関係についての科学や学問は確立されていないのです。

こどもたちには、自分たちが育つ環境を選ぶことができません。未来を担うこどもたちが心身ともに健全に育つことができる環境を保障することは、社会全体の責任です。

この責任を果たすために、学問の領域を超えて、こどもを取り巻く環境＝「こどもの環境」の問題に関心や係わりのある研究者や実践者が集い、共に研究し、提言をし、実践してゆくなかで、こどもの成育に寄与する環境科学を確立することが、『こども環境学会』の目的です。

こどもたちのために豊かな成育環境を実現することに関心を持っておられる方の参加をお待ちしております。

平成15年1月

こども環境学会設立発起人会

代表 仙田 満

Introductory message for establishment of the association

Children's growth is now in danger.

- Bullying, school refusal, youth' crimes, aggravation of mental and physical health -

Living in a prosperous life, various social phenomenon related to children are remarkably raised; such as school refusal, delinquency, crimes and living custom disease. It is worried that in both children's minds and body, 'activation' has become low.

It is also said that various issues are raised in human relationships such as bullying and child abuse by causing of accidents and danger to children. At various fields, such as home and schools, many problems occur to children.

Environments surrounding children are getting worse.

- Lack of 'children's point of view' in urbanization -

Why is such a situation happening?

In Japan, since 1950, because of aiming to economical prosperity, urbanization and destruction of natural environments have proceeded and the function of the family and society has enormously changed in function and efficiency has been given priority. We wonder if 'children's point of view' has been ignored.

We believe that in extreme change of environments surrounding children, it was not sufficiently grasped how the change of environments may have influenced them, and therefore, only strategies like symptomatic treatments were carried out. Science and academic fields studying relationships between environments surrounding children, and growth of health and body has not been established yet. A 'road map' is necessary to construct a social environment in which children can grow well.

Creation of environments related to children's growth

- Interdisciplinary synthetic science in co-operation with practitioners and academic researchers -

Children cannot choose the environment in which to grow. It can be thought that environments where children can grow healthily, who are torchbearers of our future, will create the future. Crossing over academic fields, gathering researchers and practitioners, researching, making suggestions and practices together, establishing environmental science relating to children's growth and realizing to create better environments for children are our aims of 'Association for Children's Environment'.

We are waiting for participation from all people who are interested in the creation of an enriched growing up environments of children.

Jun, 2003.

Director of the Association for Children's Environment

Mitsuru Senda

『こども環境学会』設立の意義と目的

1 「こどもの環境」に関わる総合的な学術研究体制の確立

- ① 既存のこどもに関わる学会には、児童心理学、教育学、社会学、児童福祉学、保健学、医学などがありますが、こどもを取り巻く環境＝「こどもの環境」のソフト分野に関わるものが多く問題それぞれの学問分野内での学術組織であり、学際的な活動は少ないのが現状です。
- ② 都市、建築、社会工学などハードに関わる分野においては、少数の研究者が、こどもの環境の問題を扱っていますが、工学技術が主流の学会においては、『こども環境』は中心的なテーマにはなりにくい状況です。
- ③ 学際的にこどもの問題をテーマとする学会として、「日本子ども社会学会」、「日本子ども学会」などがありますが、「こどもの環境」にテーマを絞って、ハードとソフトの両面から学術的に取り組む活動はなされていません。

2 「こどもの環境」づくりへのすべての人の参画

- ① 本学会は、学術研究だけが目的ではありません。学際的な研究を「こどもの環境」の現場と結ぶことも大きな目的のひとつです。研究者と現場での実践者が、協働することによって、「こどもの環境」をよりよいものにしてゆくことが可能です。
- ② 保育、教育、福祉、保健、医療、スポーツ、こどもの文化活動、地域社会、まちづくり、施設や環境づくりなど様々な側面で、こどもとかかわりのある人々の参画と交流をめざします。
- ③ また、子育て中の家族や子ども達自身が、自らの生活環境をよりよいものとしてゆくことを支援します。

3 「こどもの環境」について総合的な施策の推進

- ① こどもや「こどもの環境」に関わる施策については、国においても、地方自治体においても、教育、福祉、医療、都市・建築、交通等各部局に分散しており、横断的、総合的な背景推進体制がありません。
- ② 最近、こどものための施策について部局を超えて、総合的に取り組もうとする試みもみられるようになってきており、「こどもの環境」4 に関して、学術的な根拠に基づく施策提案が必要とされるようになってきています。

4 「こどもの環境」の問題についての啓発

- ① こどもを取り巻く環境＝「こどもの環境」の大きな変化について、憂慮する声もありますが、一方で、こどもはどんな環境でも遊び、育ってゆくという考えも多いようです。「こどもの環境」の変化や現状の問題点について、学術的な調査と分析を行い、評価を行う必要があります。
- ② 家庭、教育、福祉、保健、医療など、こどもを取り巻く現場にいる人たちに対して、学術的な根拠に基づく総合的な観点から、拠り所となる考え方や指針を提示する事が求められています。
- ③ こどものための活動を行う住民団体やNPO組織は増えていますが、その活動を学術的な側面から支援する体制も望まれます。

5 「こどもの環境」に関わる国際ネットワークの構築

- ① こどものための冒険あそび場運動や人権問題に先駆的に取り組んできた欧米諸国をはじめ世界各国との情報交換や人材交流を通して、「こどもの環境」に関わる国際的な学術ネットワークを構築する必要があります。
- ② アジアをはじめ急激な都市化の進展する発展途上国等に対して、日本における都市化によるこどもへの影響等の研究成果をふまえ、こども達のための都市づくり、国づくりに向けて国際協力してゆくことも期待されます。

Aims of the Association for Children's Environment

1. Establishment of a synthetic academic research network related to 'children's environment'

We aim to make connection with all academic fields related to children's academic fields such as urban planning, architecture, landscape design, sociology, pedagogy, childcare sciences, psychology, physical sciences, medical sciences and social welfare.

2. Participation of all people related to 'children's environment'

We welcome participation of not only academic researchers, but also practitioners working in children's fields such as homecare, childcare, education, local community and government.

3. Promotion about 'children's environment'

We aim to promote widely the importance of environments for children by identifying influences which environments surrounding children give to children's growth, from the academic viewpoints.

4. Promotion of synthetic policy for 'children's environment'

By crossing over different fields, such as education, welfare, medicine, urban planning, transport, police, we create suggestions and make promotion of synthetic policy aiming to creating environments for children.

5. Making an international network of 'children's environment'

By making connections with advanced countries in creation of environments for children and various countries where progress of urbanization is forecast, we aim to construct international network of children's environments.

Planned activities of the Association for Children's Environment

1. Hold an annual conference and various small group meetings
 2. Publish a journal and newsletters
 3. Offer information on the internet
 4. Hold symposiums, lectures and training courses
 5. Make and open academic data bases
 6. Practice and support for creation of children's environments
 7. Create a network with other related institutions in Japan or abroad
 8. Make suggestions on policy to the national and local government
 9. Present awards on achievements related to improvement of children's environments
- And other necessary activities to achieve the goals of the association.

1

概 要

こども環境学会・設立記念国際シンポジウム



大会事務局

こども環境学会・設立記念国際シンポジウムの概要

テーマ：『こどもと環境：都市化の中のこどもたち』

開催日：2004年 5月4日（火）・5日（水）

会場：建築会館ホール（東京都港区芝 5-26-20）

主催：こども環境学会

後援：国土交通省、文部科学省、厚生労働省、環境省

（社）日本建築学会、（社）日本都市計画学会、（社）日本造園学会、（社）日本発達心理学会、日本保育学会、（社）日本ユネスコ協会連盟、（社）日本公園緑地協会、（財）公園緑地管理財団、（財）都市緑化基金、（社）都市緑化技術開発機構、（社）全国建設室内工事業協会（社）都市計画コンサルタント協会、（社）日本造園建設業協会

参加者数：5月4日（火） シンポジウム；約320人 イベント；約200人

5月5日（水） シンポジウム；約250人 イベント；約200人

延べ参加者数；約970人

《開催概要》

第1日目：【5月4日（火）】10:00～19:00

国際シンポジウム

わが国のこどもの環境の現状、ユネスコの Growing Up In Cities Project や急速に都市化の進展するアジアからの報告など、世界的な都市化の中で、子ども達の環境がどのように変化し、子どもたちがどのような影響を受けているのかなどについて、課題を共有し、世界のこども環境の向上に向けて議論しました。

基調講演：

仙田満（東京工業大学教授：環境建築学）

記念講演およびシンポジウム：

ロジャー・ハート（ニューヨーク市立大学教授：環境心理学）

ロビン・ムーア（ノースカロライナ州立大学教授：都市計画学）

ノエル・ウォルシュ（ベナン医科大学教授：精神医学）

サロージャ・クリシュナスワミ（マレーシア国民大学教授：精神医学）

リーラ・リアン（ベナン医科大学：児童精神学）

陳会昌（北京師範大学教授：発達心理学）

コーディネーター：木下勇（千葉大学教授助教授：環境計画学）

※ 17時より、設立総会および交流会を開催しました。

第2日目：【5月5日（水）】10:00～16:00

午前：パネルディスカッション：「こどもを育む環境を考える」

都市化の中で大きく変化してきた子どもたちを取り巻く環境と子ども達の健全な成育に係わる問題点や課題を様々な分野や立場から論じていただきました。

パネリスト：（一人当たり30分程度の問題提起または提案をお願いします。）

織田正昭（東京大学文部教官：発達医科学）

小澤紀美子（東京学芸大学教授：住環境教育学）

汐見稔幸（東京大学教授／臨床育児・保育研究会：教育人間学）

コーディネーター：福岡孝純（東京農業大学教授：スポーツ環境学）

午後：フロアセッション：「こどもと共に元気な社会づくりを」

午前に提起された課題を引き継いで、パネリストからこどもの健全な成育へむけての取り組みや問題点をご紹介いただきながら、今後のより良いこども環境づくりをめざして取るべき方策やこども環境学会の果たすべき役割について、会場の参加者も交えてディスカッションを行いました。

パネリスト：

大日向雅美（恵泉女学園大学教授／あい・ぼーと施設長：発達心理学）

塩川寿平（静岡県立大学教授／野中保育園：保育学）

住田正樹（九州大学教授：こども社会学）

コーディネーター：神谷明宏（聖徳大学助教授／全国子ども会連合会：児童学）

親子向けイベント概要

こども環境学会は、学術的な研究成果をこども達のための環境づくりに活かしてゆく活動をめざしています。この大会では、こども達のために活動しておられる団体と研究者そして参観される親子との交流を目的として、イベントや展示を行いました。参加団体は以下の40団体です。

■中庭等での親子向けワークショップ

2日間にわたって、「まちをあそぶ、まちをつくる」をテーマに親子で参加できるワークショップイベントを開催しました。

秋津コミュニティ（千葉県習志野市）
あそび・劇・表現活動センター アフタフ・バーバン
NPO 木の建築フォーラム
子供たちと夢を創る会
SAVE21 実行委員会+千葉大学工学部小林研究室
全国子ども会連合会
たのしいのひ
東間栂子
日新カモミール
(財) 日本玩具文化財団
日本大学芸術学部桑原研究室
プロジェクト・アドベンチャー・ジャパン
武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科・及部研究室

■ギャラリー等でのパネル展示

中庭をはさむ両側のギャラリースペースに、こども達のための環境づくりなどに努力されている団体の活動をパネルで紹介しました。参加団体は以下の通りです。

おおぞら教育研究所
開発教育教会
神奈川県環境計画課
環境教育プログラム「プロジェクト・ワイルド」
吉日丑ノ刻
キッズゲルニカ国際子ども平和壁画プロジェクト
クルマ社会を問い直す会
国際識字文化センター (ICLC)
特別非営利活動法人子どもとメディア
コマーム
NPO 法人自然楽楽倶楽部
シャプラニール=市民による海外協力の会

商学交流事業和田町いきいきプロジェクト・和田町
コモン運営委員会
全国学校飼育動物獣医師連絡協議会
地域情報研究所
TOKYO 区立健康学園連絡会
(社) 日本建築学会
NPO 法人日本子ども NPO センター
特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会
(社) 農山村漁村文化協会
野中保育園
NPO 法人びーのびーの
プレイグラウンド・セイフティ・ネットワーク
プロジェクト・アドベンチャー・ジャパン
ユーカーリ福祉会&小林・大木企画
よこはま1万人子育てフォーラム
ラオスのこども

■書籍販売

シンポジウム参加者らのこどもや環境に関わる書籍等を販売いたしました。

■一時保育

東京大学教育学部汐見研究室・臨床育児保育研究会環境部会の黒岩佐和子氏を中心として、保育士の方々が「自分たちでつくる保育環境」をテーマに一時保育スペースをつくりました。

■救急待機

こどもたちに遊びや活動的なプログラムを提供するワークショップなどが予定されたので、東京大学医学部発達医科学教室にお願いし、保健士・三木裕子氏と連絡補助員・花井みき氏に、救急対応のために待機していただきました。特に救急を要する事故はありませんでした。

こども環境学会 設立大会&国際シンポジウム

プログラム (1日目)

5月4日(火・祝)

- 10:00** **開会**
挨拶・経緯説明 中山豊(こども環境学会設立事務局長)
学会趣旨説明 織田正昭(発起人・東京大学 発達医科学)
- 10:15～11:00** **基調講演**
講師：仙田満(発起人代表・東京工業大学 環境建築学)
“都市化とこどもの成育環境”
- 11:00～12:00** **記念講演**
講師：ロビン・ムーア(ノースカロライナ州立大学・アメリカ 都市計画学)
“Growing Up in Urbanizing World”
- 12:00～13:30** **－昼食・休憩(90分)－**
- 13:30～16:50** **国際シンポジウム「こどもと環境：都市化の中のこどもたち」**
講演：ロジャー・ハート(ニューヨーク市立大学・アメリカ 環境心理学)
“It takes a child to raise a village, or neighborhood”
講演：ノエル・ウォルシュ(ベナン医科大学・マレーシア 精神医学)
“Psychological Trauma and Child Abuse”
講演：サロージャ・クリスナスワミ(マレーシア国民大学・マレーシア 精神医学)
+ リーラ・リアン(ベナン医科大学・マレーシア 児童精神学)
“Environmental Influences on Children”
講演：陳会昌(北京師範大学・中国 発達心理学)
“The Ecological Environment of Chinese Children”
コーディネーター：木下勇(千葉大学・環境計画学)

－休憩(10分)－
ディスカッション(50分)
- 17:00～17:20** **設立総会**
開会の挨拶
規約案および組織案について
理事選挙結果および役員構成案について
会長就任の挨拶
- 17:40～19:30** **交流会**

こども環境学会 設立大会&国際シンポジウム

プログラム (2日目)

5月5日 (水・祝)

10:00 ~ 12:00 パネルディスカッション「こどもを育む環境を考える」

討論者：織田正昭 (東京大学大学院 発達医科学)
“高層住居居住を中心としたこども環境学”

小澤紀美子 (東京学芸大学 住環境教育学)
“こどもを育む環境を考える -こどもの居場所づくり-”

汐見稔幸 (東京大学 / 臨床育児・保育研究会 教育人間学)
“環境とはなにか-原理から考える”

コーディネーター：福岡孝純 (東京農業大学 スポーツ環境学)

12:30 ~ 14:00 -昼食・休憩 (90分) -

14:00 ~ 16:00 フロアセッション「こどもと共に元気な社会づくりを」

討論者：塩川寿平 (東横学園女子短期大学 / 野中保育園 保育学)
“大地教育でこどもと共に元気な社会づくりを”

住田正樹 (九州大学 こども社会学)
“健やかなこども社会をめざして -発達社会学の立場から-”

大日向雅美 (恵泉女学園大学 / あい・ぽーと施設長 発達心理学)
“こどもと共に元気な社会づくりを”

コーディネーター：神谷明宏 (聖徳大学 / 全国子ども会連合会 児童学)

16:00 設立大会 閉会式

こども環境学会・設立記念国際シンポジウム

「こどもと環境：都市化の中のこどもたち」

〈概要報告〉

こども環境学会の設立大会として、2004年5月4日（火）・5日（水）の2日間にわたり東京・港区の建築会館において国際シンポジウム『こどもと環境：都市化の中のこどもたち』を開催しました。参加者は、シンポジウム参加者が2日間合わせて、約570人、中庭で開催された賛同団体等によるパネルセッションやイベントには、約40団体が参加し、約400人の親子連れに楽しんでいただきました。

【わが国におけるこどもの環境の問題とこども環境学会の目的】

1日目は、最初に仙田満氏（東京工業大学、環境建築家、こども環境学会会長）が、「都市化とこどもの成育環境」と題した基調講演を行い、こどもの成育過程において遊びは感性、創造性、身体性（体力・運動能力）、社会性などを育む役割を持っており、わが国におけるこどもの生きる力の低下の一因は、都市化の進展に伴って遊びとその環境が貧困化していることであると力説し、多くの調査結果から、遊び空間の減少と画一化を示し、遊びが発生しやすい空間の構造を提案しました。そして、こども環境学会の設立が、都市・建築などハード分野の研究者ばかりでなく、教育・福祉・心理・保健・医療などソフト分野も含めた幅広い研究者と、さらにはこどもの現場にいる実践者とも連携することによって、こどもが健全に成育することのできる環境を実現することが目的であることを説明しました。

【こどもの参画によるこども環境の調査と行動】

海外からの講演者として、ロビン・ムーア氏（ノースカロライナ州立大学・アメリカ 都市計画学）が、世界各地で実践されている「都市化する世界の中でのこどもの成育」“Growing Up in Urbanizing World”（略称：GUIC）と称する、こども参加のアクション・リサーチの手法を紹介しながら、こどものための都市環境指標を提案し、こどもを大切にすることは、持続可能な開発であり、よい都市はこどもが中心であるというケヴィン・リンチの言葉を再確認しました。

続いてロジャー・ハート氏（ニューヨーク市立大学・アメリカ、環境心理学）は、ちいさなこどもにも環境と関わる能動的な能力があるとし、「村あるいは近隣社会を育てるには、こどもが必要だ」と提案しました。居住環境、託児所、学校などがいかにこどもたちの能動性を受け付けられない環境であることが多いかを事例で示し、こどもたちの参画によるコミュニティの調査と行動の重要性を説きました。

【アジアにおけるこどもの成育環境】

ノエル・ウォルシュ氏（ペナン医科大学・マレーシア、精神医学）は、「精神的外傷と児童虐待」をとりあげ、児童虐待やドメスティックバイオレンスの増加とそれによる精神的外傷の複雑さ、虐待診断の難しさなどについて説明しました。

リーラ・リアン女史（ペナン医科大学・マレーシア、児童精神学）は、マレーシアにおける子育て、学校教育、遊びの変化など「こどもに対する環境の影響」の重要性を示し、サロージャ・クリスナスワミ女史（マレーシア国民大学・マレーシア、精神医学）は、マレーシアにおける民族や文化による虐待認識の違いをデータで示し、「児童虐待の認識における文化的影響」について紹介しました。

最後に陳会昌氏（北京師範大学・中国、発達心理学）は、中国における児童政策について紹介しましたが、中国においてもやはり発育障害や学校教育での問題が生じていることについても報告がありました。また中国は、欧米よりこどもの行動を抑制する傾向が強いことなども紹介されました。

木下勇氏（千葉大学、環境計画学）の司会による会場との意見交換の中で、都市化あるいは民主化の遅れている南半球などで興味深いこどもの参画の取り組みが見られること（ハート）、都市の中に空き地を計画的につくるプロジェクト（ムーア）、

民族や文化的な価値観の差はあっても倫理的な価値観においては共通認識を持つ必要があること（ウォルシュ）、こどもの参画が児童虐待を減少させる可能性があること（ハート）など、幅広いこどもの問題に対して、こども環境学会が取り組むべき多くの国際的な問題が提起されました。



【こどもを育む環境を考える】

2日目は、午前中は「こどもを育む環境を考える」というテーマで、3名の講師が専門の立場から問題提起を行いました。

織田正昭氏（東京大学大学院 発達医科学）が「高層住居居住を中心としたこども環境学」と題して、高層居住における問題点として落下事故や火災の危険性、母子の健康上の懸念、幼児の自立の遅れの傾向、外出のしにくさなどがあることを紹介し、高層居住によって①母子の行動学的変化、②母子の心理的变化、③育児スタイルの変化、④乳幼児の感覚の変化、⑤妊婦への影響、⑥母子の健康度への影響などが見られることを警告しました。こうした問題に対して、住む人、建てる人、管理する人、行政者、研究者などがそれぞれの立場で対応を行ってゆく必要性を説き、こども環境学会がその役割の一翼を担うべきことを示唆しました。

小澤紀美子女史（東京学芸大学 住環境教育学）は、「こどもの居場所づくり」と題して、こどもたちが高度成長以降「学校化」されてきたこと、友達をはじめとする他者や自然との関わりや直接体験が失われてきたことに警鐘を鳴らし、こどもたちの参画、学校と地域の連携などを事例で紹介しながら、「学校は、小さな町であり、大きな家」、「地域全体が屋根のない学校」といった考え方を提案し、自尊感情を育む大切さ、環境教育の中で「自然」ばかりでなく、「人のつくってきた人工環境」を学ぶことの重要性、総合的な学習が教育の主体を地域に取り戻すことであることを説き、こどもの自己形成空間の再構築の必要性を強調しました。

汐見稔幸氏（東京大学／臨床育児・保育研究会 教育人間学）は、「環境とはなにかー原理から考える」という視点から、「教育とは環境づくりではないか」と提起しました。ピアジェらは「環境との相互作用」を重視しなかったが、実際にはこどもたちは、周辺の環境を読み取って判断し行動しているのであり、「能動性を発揮できる環境を与える」ことが「能動性を育てる」ことにつながると説明しました。また、川遊びを例にとり、環境は、「川」という物理的環境だけではなく、「川で遊んでごらん」という周りの大人たちの期待という「心理的環境」、体験を共有する友だちとの「仲間環境」、「魚がどこにいるか」といった遊びに必要な情報を提供する「メディア環境」などから構成されていることを指摘しました。これらをこどもにとっての「外的環境」とし、こども自身の体験によってその遊びの楽しさなどを身体が記憶している「内的環境」の重要性も指摘した。さらに、親自身に遊びの楽しさ体験などの「内的環境」が形成されていないことから、この再形成が必要と提案しました。こうした様々な環境づくりをコラボレートしてゆくのが「こども環境学会」であるとの提起がありました。

福岡孝純氏（東京農業大学 スポーツ環境学）の司会で会場との意見交換が行われ、ハードとソフトの連携によるこども環境づくり（小澤）、社会の変化の大きさの中で高層居住による影響だけを検証する難しさ（織田）、モデル的な環境の実践による新しい環境の創造（汐見）、教員養成の課程の再検討（汐見）、学校が地域を巻き込んで変わってゆく必要性（小澤）、都市の一極集中の問題（小澤）、メディアが問題だという指摘だけでなく生活をどうするべきかという提案が重要である（汐見）などの意見と提案が出されました。

【こどもと共に元気な社会づくりを】

午後は、神谷明宏氏（聖徳大学／全国子ども会連合会 児童学）の進行で、「こどもと共に元気な社会づくりを」というテーマで、3名の講師と会場からこどもたちの現場での様々な取り組みが紹介され、フロアと一体になった議論が展開されました。

最初に、塩川寿平氏（東横学園女子短期大学、野中保育園 保育学）より、ご自身が運営されている野中保育園でのどろんこ保育や体験を重視した「大地教育」の紹介を通して、こども自身の体験によって健康や安全能力が育まれることが示されました。

また、住田正樹氏（九州大学 こども社会学）は発達社会学の立場から、仲間集団こそがこどもたちの社会性を育む場であったが、それが失われてきたことが、不登校、引きこもり、家庭内暴力、いじめ、非行などの問題につながっていることを指摘し、こうした仲間集団の役割の再確認と遊び環境の必要性を訴えました。

大日向雅美女史（恵泉女学園大学／あい・ぼーと施設長 発達心理学）は、子育てにおける母親の孤立などの問題に対して支援をしている「あい・ぼーと」の活動の紹介を通して、ボランティアなど地域との連携の必要性を強調しました。

会場からは、こどもたちの様々な現場からの報告が相次ぎました。健康学園での外遊びの実践、こどもと一緒に真剣に遊ぶ教師や児童館職員、「街遊び」を仕掛ける演劇集団「アフタフバーバン」、自分の責任で遊ぶプレイパークの実践の一方でそれを「うるさい」と見る社会の目、川で遊ぶ「川ガキ」を復活させた貝塚市の例、公園での異年齢遊びの重要性、「秋津コミュニティ」での学社連携の試みなどが報告されました。

潔癖な衛生や過度の安全を期待する社会的な風潮に対しては、こども自身における免疫的な能力や安全能力を育む必要性が講師らから強調されました。また、仕事としてこどもに関わっている人だけでなく、現在ボランティアとして支えている立場の人たちを今後どのように社会システムとして確立してゆくか、地域において親が安心してこどもを育てることのできる環境をどうつくってゆくかなどが問題であることが会場から指摘されました。

最後に講師からは、物理的環境と心の環境の関係の探求（汐見）、学問的で絶対的なものを社会や文化の中にどう活かしてゆくかの問題（織田）、日本では少ない統合的なアプローチが期待されること（小澤）、こどもの遊び集団の必要性に対する社会的理解の促進（住田）、こどもをけなしたり、せかしたりしない保育（塩川）、「一生の子育て」に向き合うタフな精神をもつ親が求められること（大日向）などがコメントされました。



【フィナーレ】

この後、一本につながったカラフルな布を参加者全員が持って、中庭へと繰り出し、踊りながら、布がネット状につながられ、中庭のキャンパス屋根に向かって吊り上げられ、参加者全員のネットワークを象徴するようにカラフルなドーム空間が造られました。仙田会長が、研究者と現場の方々が一緒になって、研究、実践、交流し、社会へ発信し、こどもたちの成育環境の向上のために努力して行こうと呼びかけ、設立大会は終了しました。



文責・写真：こども環境学会事務局長 中山 豊